

## ローマ五輪の東北大学エイトをめぐって －記念行事と関連記事の紹介－

曾根原 理

東北大学は100年を超える歴史の中で、多くの著名な研究業績を挙げ、また研究者の育成を行ってきた。一方で音楽、演劇、スポーツ等、教育・研究以外の活動については、必ずしも活発とはいえない。そうした中で、1960年（昭和35）のローマ五輪へのエイト・クルー出場は、特異な出来事といえよう。現在に至るまで、東北大学出身の五輪選手といえ、彼等以外を思い浮かべることは困難である。

東北大学のエイト・クルー（漕手8名、舵手1名）は、1960年5月7-8日に埼玉県の前橋市で実施された国内予選で1位となり、五輪出場を勝ち取った<sup>1)</sup>。準決勝で記録したタイム5分59秒5／2000mは、公式戦における日本記録として20年以上破られることがなかった<sup>2)</sup>。後述のように、当時は世界でも6分を切るクルーは多くなかったことから、五輪本番での活躍が期待された。

ローマ五輪に派遣された漕艇競技の日本代表は、東京大学の男子舵手付フォアと東北大学の男子エイトの2クルーであった。一行は8月8日に日本を出発し、ローマ到着後は海外遠征未経験のため、体調管理や艇の調整に苦労した。東北大学エイトは、8月31日の予選ではドイツ・フランス・イギリス・日本（東北大学）・スイスの順となり、敗者復活戦に回った。9月2日の敗者復活戦で1位になれば決勝進出であったが、イタリア・日本・スイス・オーストリアの順となった。東北大学クルーは最後の500mでイタリアとデッドヒートを演じたが、60cm差で敗れ、敗退した。

現在、東北大学史料館では、ローマ五輪クルーの関連資料をいくつか所蔵している<sup>3)</sup>。さらに、日本代表選手団の名簿やユニフォームの一部が寄託されている<sup>4)</sup>。そうした縁もあり、以下ローマ五輪出漕の東北大学エイト・クルーに関わる2015年の2つのエピソードを紹介・解説する。

### 1. ローマ五輪55周年記念レガッタ

伊達政宗の命を受けた支倉常長は、1613年（慶長18）10月に月の浦（宮城県石巻市）を出帆し、約2年を費やしてイタリアに到着、遣欧使節としてローマ法王に謁見した。2015年はその400周年となることから、宮城県や宮城ローマ交流クラブが「慶長遣欧使節出帆400周年記念事業実行委員会」を立ち上げ、「イタリア・ヴァチカン訪問」を企画した。その一環として、ローマ五輪55周年記念のレースが計画された<sup>5)</sup>。訪問旅行団は、ローマ交流クラブ関係者、県内高校生グループ、県内自治体職員など総勢80余名となった。

五輪のボート競技が行われたアルバーノ湖 Lago di Albano は、ローマ県カステル・ガンドルフ自治体 Castel Gandolfo（人口約9,000人、ローマから南東へ約23km）にある。今回の記念ボート・レースも55年前と同じアルバーノ湖で開催されたが、往年の名選手たちも既に高齢であることから、親善を目的とし、日本側は五輪選手の後輩や他大学出身者も加わったクルーが編成された。イタリア側も同様である。

今回のレースは最終的に、エイト1杯、舵手付フォア2杯を編成し、3レースを行うことに

なった。日本側メンバーは、東北大学から千葉建郎（昭和31年入学）、伊藤武（同34年）、持丸知也（同前）、今仁雄一（36年入学）、坂本高樹（37年入学）、栗林寿（47年入学）、小澤浩司（54年入学）、曾根原理（55年入学）、他大学からは福田紘史（東大昭和36年卒）、矢島寛三（防衛大39年卒）、杉山徳義（北大44年卒）、佐々木正彦（東海大52年卒）、木村長努（立命館大52年卒）、阿部肇（中央大60年卒）の合計14名が3艇に分かれ出漕した（数名は複数レースに参加）。このうち、千葉（ローマ五輪



エイト・クルー(背中が筆者) 共同通信社提供

の東北大学エイト主将)、福田（ローマ五輪の東京大学フォア）、阿部（ロサンゼルス、ソウル、バルセロナの各五輪日本代表）の3名が元五輪選手である。また、応援団も10名ほど参加し、中には日本ボート協会会長の大久保尚武（ローマ五輪の東京大学フォア選手）の姿もあった。

大半のメンバーは、7月25日に成田を出発し、アルバーノ湖畔のホテルを拠点とし、地元カステル・ガンドルフォ自治体の行事に参加したり、ローマ市内テベレ川河岸にあるローマ・ボートクラブを表敬訪問するなど親善行事を重ね、レース当日を迎えた。

30日の午後に行われたレースは、アルバーノ湖の1000mコースで実施され、舵手付フォアがイタリアの2勝、エイトが日本の勝利となった。レース後は湖畔のホテル Villa del Cardinale で遣欧使節400年記念交流レセプションが開かれ、若生正博使節団長（県副知事）、在イタリア日本大使、イタリア大統領府高官などが参加した。

また、この機会に、東北大学里見総長からの親書<sup>6)</sup>がローマ大学ラ・サピエンツァ校ガウディオ総長に届けられた。その文面は次のとおりである。

July 14, 2015

Dear Rector Eugenio Gaudi,  
Sapienza University of Rome

I am very honored to be sending this letter to you.

As I'm sure you know, 2015 marks the 400th anniversary of the dispatch of the diplomatic mission from Japan (from what is present-day Miyagi prefecture) to Italy.

For one of the events being organized to commemorate this anniversary, the Italian and Japanese men's rowing teams from the 1960 Rome Summer Olympics will reunite and hold a goodwill competition. The Japanese Olympic team at that time has largely made up of members of Tohoku University's eight-man team.

I would like to make use of this rare and valuable opportunity to express my

appreciation for the kindness we have received from Sapienza University of Rome, and upon receipt of this letter, to also ask your cooperation in future endeavors between our universities.

In 2007, your Rector at the time, Dr. Renato Guarini visited Tohoku University on the occasion of our 100th anniversary celebration. In his congratulatory address, he said "In this era of expanding globalization, universities must take the lead in being models of patience, consideration, and reconciliation as we aim to create peace and remember our role in serving society by creating new knowledge. These ideals have been at the foundation of universities for hundreds of years." These important remarks are still deeply respected at the university today, and I wish to again extend my appreciation for them.

Over four years have passed since the unprecedented destruction caused by the Great East Japan Earthquake. Although our facilities and laboratories suffered extensive damage, with help from within Japan and around the world, we have returned to our pre-disaster status. In March of this year, the Third UN World Conference on Disaster Risk Reduction was held in Sendai, and researchers from our university also took part, making contributions to disaster risk reduction on a global scale.

When I took the office of President in April 2012, I set two goals for my term: "Leap to World-Class" and "Leading the Way towards Reconstruction and Regeneration". Above all else, in order to truly leap ahead in international education, we must draw upon our strongest fields, and bring them to the global stage. Further, we must also give great importance to creation of human resources who make contributions to bettering humanity, as well as forge strong, collaborative education programs with leading overseas universities.

Sapienza University of Rome first formed a university-level academic exchange with our university in 1990, and between 2008 and 2012, we concluded five department level academic agreements, as well as engage in active staff, researchers and student exchanges. Based on these successes, in 2013, Sapienza University of Rome, Leiden University and Tohoku University formed a tri-university partnership to create the opportunity for academic debate and discussion in the Arts and Letters discipline. This partnership will lead to international symposia where researchers in the field of Asian Studies and the Humanities and those from the other universities will be able to overcome discipline divisions and face current pressing issues head-on. This will allow researchers to identify shared issues, work together closely, and work towards creating fruitful results. As a result of forming this partnership, Tohoku University has managed to form collaborative research relationships with European institutes, primarily focused

on Sapienza University of Rome and universities in Europe. Our faculty of Arts and Letters plans to hold a kick-off symposium in October of this year at Florence University. We have great hopes in the increasing developments in the field of Japanese Studies. By engaging in these types of academic exchanges and creating new developments, I strongly feel that Sapienza University of Rome and Tohoku University have been forming even stronger bonds as we cooperate to solve problems on a global scale.

In closing, in addition to once again thanking you for all the support and kindness we have received from your university. As we continue our efforts to strengthen our global efforts I am certain that we will create new, even deeper ties with Sapienza University of Rome, and I thank you in advance for your support and understanding in these endeavors. Sincerely yours,

(Signature)

Susumu Satomi

President, Tohoku University

## 2. イタリア・クルー情報

筆者は30日のレース後ローマ市内に戻り、この機会に東北大学エイト・クルーに関する記録の収集を試みた。ローマ五輪のレースで激しく争った日本（東北大学）クルーに関して、当時の新聞等に記事が見られるのでは、と期待したのである。翌31日、ローマ大学ラ・サピエンツァ校の大学院生 Piera Girolamo 氏（2015年10月から東北大学に短期留学中）の協力を得て、地元資料が多いと見込まれるローマ市立カピトリノ文書館 Archivio Storico Capitorino において調査を実施した<sup>7)</sup>。担当の館員に相談したところ、ローマ市で発行されたスポーツ新聞（イタリア語）2種を勧められたので、限られた時間でローマ五輪前後の記事を検索した。結果として、東北大学クルーに関する記事は皆無に近かったが（レース写真程度）、相手のイタリア・クルーについて多少の知見を得ることが出来た。以下①～⑥は、その記事の翻訳である（元の記事のうち①⑤は和訳の箇所に、他は末尾に掲載）。

なお翻訳作業については、ローマ大学ラ・サピエンツァ校出身で現在東北大学大学院研究生の Davide Bitti 氏に試訳作成を依頼し、筆者がボート競技の基礎知識を生かして語句を補訂し、合同で検討の上日本語を整えた。



文書館の入口付近

## ① コリエーレ・デロ・スポーツ紙 Corriere dello Sport 8月8日記事

7月18日のエイト予選において、フィナンツァ(税務機関)チームとコラツィエーリ(大統領護衛騎馬憲兵)チームの争いに、モト・グッツィ(バイクメーカー)のチームが割り込み、両方に勝った。写真は、勝利し湖面から艇を運び出すアリッピ選手たちの姿。翌日、モト・グッツィのチームはコラツィエーリとの再戦には参加しないことを表明した。



## ② コリエーレ・デロ・スポーツ紙 8月9日記事

トリノのアルミダ艇(アンセルミ選手を欠く)舵手付ペアで大活躍  
真っ暗闇の中で行われた舵手無ペアの試合は無効

今朝再び行われる予定であるエイトの代表決定戦への関心高まる

ミラノ8日-ちょうど試合のスタートの前に始まった激しい雷雨は、ミラノのイドロスカール湖 Idroscalo di Milano で開かれた予選を1時間半も延期させた。

アルミダ艇、パツランザ艇、ポシッリポ艇の舵手付ペア予選は、18時半ではなく19時45分にスタートした。

協会幹部、時間記録員、審判も揃った。緊張感溢れる雰囲気の中であったが、予選の試合は中止が検討されていた。やはり、湖面の状態が悪い。風が吹き、雨も止まなかったため、今にして思えば中止するべきだったかもしれない。だが、第2戦の後半と第3戦の全ては完全な暗闇の中で実施された。そのため、4つのレースのうち2つは完了できたが、舵手無ペアのレースは真の暗闇の中で行われたため、結果が無効とされた。試合に出たジンナスティカ・トリエスティーナ艇とカノッティエリ・ラリオ艇の2つのボートは、何も見えないままでゴールインした。1つのボートは直進できず、傾きながら沖合にコースを外れた。

それにもかかわらず、面白いレースであった。

舵手付ペアの選考について、さまざまな議論が交わされていた。オリンピック出場が決定していた筈のトリノのアルミダ・チームは、再度決定戦が開かれることになってしまったため、耳炎で活動できなくなったアンセルミ選手を欠いて再戦せざるを得ず、非常に憤ったという。

補欠のピレッタ選手を加えたトリノのアルミダ艇は、選考レースの開催されるミラノへ行き、結局勝利した。ピッチ45<sup>8)</sup>のスピードでスタートしたオスティーノ選手とピレッタ選手は、パツランザ艇とポシッリポ艇との距離をうまく保つことができた。残り1500メートル地点を超えたアルミダ艇は力を入れてピッチを40とし、ライバルのボートに1艇身<sup>9)</sup>のリードを得た。1000メートル地点では、さらにリードを増やし、スピードを落とすことなく勝利した。ゴール地点でのアルミダ艇と他艇の差は3艇身もあった。

ゴールインの時のアルミダ艇は、2位のパツランザ艇に7秒の差をつけ、タイムも良かった(7分37秒5)。アルミダ艇のオリンピック出場が改めて承認された。スタート時のポシッリポ艇はアルミダ艇のスピードに上手く対応し、クックルッロ選手とトリカリコ選手はアルミダ艇と同レベルで競争できそうにだったが、1000メートル地点を過ぎると調子が少し落ち、パツランザ艇にも負けてしまった。だが、二人のナポリ人(ポシッリポ艇)としては上出来だった。もう少し頑張れば、自己ベストを更新できるに違いない。

とにかく、トリーノのアルミダ艇はローマオリンピックの舵手付ペア競技でイタリアを代表することになった。舵手無ペアの選考は未定。

レースの様子を、舵手無ペアのジンナスティーカ・トリエスティーナ艇の選手たちに語ってもらった。同艇は真っ暗闇の中でも7分39秒のタイムで勝つことができた。ラリオチームのオピリナ兄弟は9秒ほど遅れた。しかし、レースは無効にされた。そもそも、なぜ視界不良の中で競技を実施したのか分からない。2つのレースは中止され、明日の朝行われることになった。

そして明日の夜は、エイトの出番である。レースに参加する海軍チームのヴァスコ・カンタレッコ選手は、扁桃炎による熱のせいで自分のホテルの部屋で休んでいるそうである。そのため、カンタレッコ選手は、パッランザで開かれたジュニア・エイトのレースで活躍したバルダス選手と入れ替えられたらしい。競技を主催するカノッティエリ・ドンゴの事務局にも連絡が届いているそうである。しかし、本当のところは明日の夜、レース会場でしか確認できない。また、イタリア漕艇協会のシリプラーディ代理人は、明日の夜の会議の後で、オリンピックに参加するイタリア・チームのリストを発表する予定であると述べた。(レナート・フェラーリ記者)

### ③ コリエーレ・デロ・スポルト紙8月10日記事

ミラノのイドロスカーロでエイトのプレーオフ

わくわくさせるレースは、海軍艇のモト・グッツィ艇に対する勝利で終わった

フィアツメ・ジャッレ艇を制し、コラツィエーリ艇が3位になった

シングル・スカルではマルチノーリ選手が敗退 ダブルではカン・ラーリオが勝利

ミラノ8月9日—マッジョーレ湖で始まり、そして2回もカステル・ガンドルフォ(アルバーノ湖)で実施されたエイトのオリンピック代表選考レースは、今日の夕方にミラノのイドロスカーロ湖で終了した。

やっとオリンピックのエイト競技でイタリアを代表するチームが選ばれた—イタリア漕艇協会が蒸し返さなければ、の話ではあるが。

論争のきっかけになったこの競技は、やっと終わった。ゴールを超えた4つの18メートルのボートの中で、選手たちが疲れ果てて動けなくなった。舵手たちは前に座っている選手に水を吹き掛けている。この「死戦」で優勝したのは、参加締切直前に参加することになったサバウディア市海軍チームである。湖岸から見ていた僅かな観客たちは、この素晴らしいレース(もしかしたら、これまでで一番素晴らしいレース)を戦った選手たちへ拍手を贈りっぱなしである。

すでに私たちは、最近書いた2つの記事で海軍チームの活躍を予測していた。今日の午後、この予測は実現した。一般の人々の間で、今回の競技は、スタイティ選手と入れ替わったチュッチ選手が所属するフィナンツァ(税務機関)チームと、カステル・ガンドルフォで先週その「フィアツメ・ジャッレ」(フィナンツァ・チームの愛称)に勝ったモト・グッツィ(バイクメーカー)チームの間の争いだと思われていたにもかかわらず、である。コラツィエーリ(大統領護衛騎馬憲兵)チームも、もちろん期待されていた。

しかし、この忘れられない最終選考レースを語る前に、カステル・ガンドルフォの皆さんを喜ばせるちょっとしたエピソードがある。アルバーノ湖の友人の皆さん、本日のイドロスカーロ湖では、モト・グッツィ艇のような岸から遠いレーンが当たった艇に不利な風が吹いていた。

逆に、海軍のチームが湖岸に近いレーンに当たったことが少し有利であったともいえる。それにもかかわらず、トラッローリ氏<sup>10)</sup>の艇が勝利したことの価値は減るものではない。なぜなら、優勝したボートの整調を務めたヴァスコ・カンタレッコ選手は昨夜、扁桃炎のため高熱にうなされていたからである。パドヴァ市出身のカンタレッコ選手は一晩中軍医の世話になり、熱を下げるためにサルファ剤や静脈内注射を受けた。それでも今日の試合の30分前に熱が37.5度あったので、かなり不安そうな顔をしていたが、海軍ならではの勇気を出し、自分のチームを勝利に導いた！しかし、ゴールインするなり、カンタレッコ選手は倒れてしまった。すぐに医者が駆けつけ救援したが、そのような状態でも彼の目は幸せで輝いていた。海軍チームはこの勝利により、メルボルン五輪やヘルシンキ五輪の時と同じく、ボート競技の世界で一番人気のエイト競技において、再びイタリア代表となった。

すでに述べた通り、2000メートルのレースは素晴らしかった。ミラノから来たコロンボ氏の号令により、四つの強力な艇は同時に凄い回転でスタート・ダッシュを開始した。海軍艇は遅しい調子でピッチ39から40で進んだ。モト・グッツィ艇はピッチ37、フィナンツァ艇はピッチ36、コラツィエーリ艇はピッチ38で漕いだ。50メートル通過後、モト・グッツィ艇がわずかに海軍チームを押さえ、やや遅れてフィナンツァ艇とコラツィエーリ艇が激しく競り合った。しかし、フィナンツァ艇の方が大統領護衛騎馬憲兵より速かった。1000メートル地点通過後、海軍艇がモト・グッツィ艇を抜いた。1500メートル地点を超え、モト・グッツィ艇が海軍艇を差し返しそうになったが、風の影響で妨げられた。同時に海軍艇がラスト・スパートをかけ、モト・グッツィ艇に1秒の10分の7先着した。コラツィエーリ艇が永遠のライバルであるフィナンツァ艇に勝利したことも書いておこう。

シングル・スカルとダブル・スカルの最終選考レースも行われた。シングル・スカルではレーベック選手が、1700メートル地点で激しい肝痛に襲われたマルティノーリ選手に勝った。ダブル・スカルでは、ラーリオ・デイ・コーモ艇があっさりと海軍艇に勝利した。

ここで、イタリアのボート競技の役職者たちにお願ひがある。間もなく始まるオリンピックについてだけに夢中になって！（アルベルト・マルケージ記者）

#### ④コリエーレ・デロ・スポルト紙 8月11日記事

イタリアのボート競技の様々な光と影

オリンピックでイタリアを代表することになったチームを検討しよう

イドロスカーロのイタズラ 海軍の賛辞

しかし、エイトのことをもう少し前に考えればよかったかもしれない

オリンピックのボート競技でイタリアの代表になろうとした各チームの間で2ヶ月も続いた争いは、先週の火曜日に行われたレースの数時間後にやっと終わった。フェデル・カノッタッジョー（イタリア漕艇協会）は、アルバノー湖でトレーニング・キャンプを受ける事になったチームのリストを発表した。選ばれたチームは下記のとおり。

シングル・スカル：ジンナスティカ・トリエステーナのレーベック選手

舵手無ペア：ジンナスティカ・トリエステーナのペトリ選手とモセッティ選手

舵手付ペア：アルミダ・トリノーのオステイーノ選手、アンセルミ選手、ブルーノ選手（舵手）

ダブル・スカル：ラーリオ・デイ・コーモのルチーニ選手とペストウージャ選手

舵手無フォア：ファルク・デイ・ドンゴのボサッタ選手、バライア選手、ガランテ選手、クロスタ選手

舵手付フォア：マンデッロラーリオ・モト・グッツィのスキッツ選手、ズッキ選手、バラッチ選手、トリンカヴェッリ選手、ステファノーニ選手（舵手）

エイト：イタリア海軍サバウディア市勤務のカントレッコ選手、シモナート選手、プリーナ選手、トッリ選手、カサリーニ選手、プラート選手、スパツィオ選手、アモリーニ選手、ピラ選手（舵手）

補欠：モイオーリ選手（モト・グッツィ）、チウッチ選手（カノッティエリ・リボルネージ）、プリーナ選手とフィオラヴァンテ選手（ラーリオ・デイ・コモ）、ピレッタ選手（アルミーダ・トリート）。

舵手無ペアとエイトの代表を除き、一ヶ月前にカステル・ガンドルフォで実施された予選レースで選ばれたチームが再確認された。

舵手無ペアとエイトでイタリアの代表シャツを着られるようになったのは、1秒差で優勝したジンナスティカ・トリエステーナチームと海軍チームである。

エイトの海軍チームは、出漕全クルーと激しく闘った上で勝利を手に入れた。一方、舵手無ペアのジンナスティカ・トリエステーナのチームは、同種目最強と言われていたプリーナ兄弟（ラーリオ・デイ・コモチーム）の一人であるエジディオ選手が肝炎で参加できなくなったため、簡単に優勝できたといわれる。

実際、このペトリ選手とモセッティ選手の勝利は、大したものではなかったと思う。唯一の相手と思われるトリヴィーニ選手とトサリーニ選手（フラックチーム）は、航路を誤り相手の船と接触しそうになったからである。舵手無ペアのレースは、やり直した方が良かったのではないだろうか。

イドロスカーロ湖で行われた情熱的なレースの様子は、すでにミラノから発信された。それを読み、スポーツにも恨みの女神ネメシスが存在しないかと考えてしまったのは私だけだろうか。

ヨーロッパの中でも水面の穏やかさで知られているイドロスカーロ湖が、今回のレースの時はかなり荒れてしまった。参加していた4艇は、割り当てられたレーンの位置によって、難易度がかなり異なっていた。つまり、岸から遠いレーンの方が、岸近くのレーンより風や波の悪影響が大きかった。モト・グッツィ艇は残念なことに、最悪の位置を与えられた。逆に海軍艇は最適なレーンを与えられた。とはいえ、海軍艇の整調のカントレッコ選手は薬を飲み、発熱状態のままでボートに乗っていたのであるが。それにしても、最適な状態で代表選考レースを行うために、オリンピック用のコース（アルバーノ湖）に代わりイドロスカーロ湖が選ばれたのに、結局裏切られてしまうとは皮肉なものだ。

舵手付フォアでモト・グッツィに負けた海軍は、エイトで復讐をした。そう言えば、本紙7月28日付の記事を見たところ、「フィナンツァやコラッツィエリやモト・グッツィではなく、海軍が勝利したらすごく面白いと思う。アッリゴ・トラッローリ氏にとって、もしかしたら、これは一番の復讐になるのではないか」と書いていた。さらに先週の月曜日の記事には「4つのチームの間では大きな差はないはずである。しかし、海軍のチームは、オリンピックまでの2

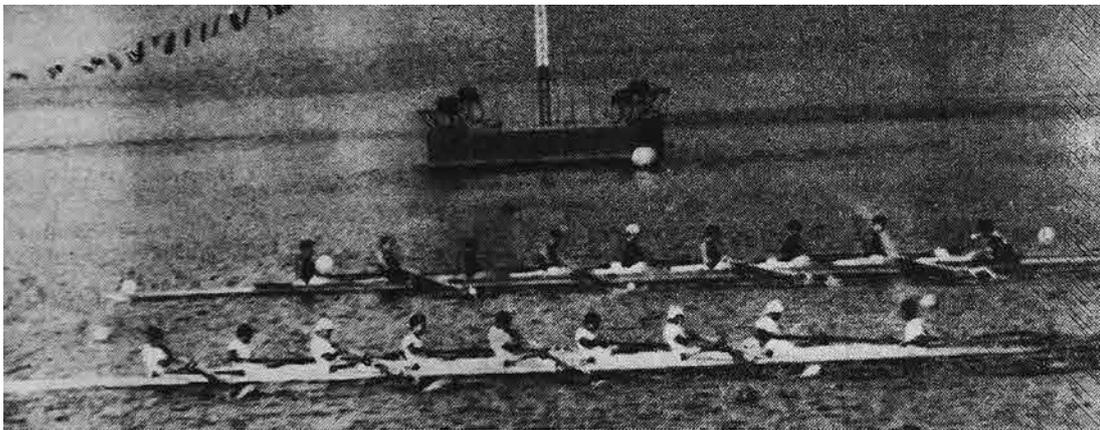
週間前には逆転勝利するのでは？」とあった。

海軍のチームに脱帽しよう！しかし、イタリア漕艇協会の幹部たちが、カステル・ガンドルフォの予選の直後に、モト・グッツィとコラツィエーリの選手によるエイト編成を命じたら、もっといいチームができたと思う。イドロスカール湖でのフィナンツァ艇には失望した。‘フィアツメ・ジャツレ’（フィナンツァ）艇はコラツィエーリ艇にも負けた。この負けはフィナンツァ艇に、普通よりもかなり大きな注文生産のオールが使われたせいだと考えられている。

とにかく、予選はもう終わった。2週間後にはイタリア代表選手たちは、オリンピックで世界中からきた優秀なチームとレースをするのである。一番期待したいチームは、舵手無フォアのファルク・ディ・ドンゴ、舵手付フォアのモト・グッツィ、舵手付ペアのアルミダ・トリノーである。ほかのチームも優勝すればいいけど。（アルベルト・マルケージ記者）

### ⑤コリエーレ・デロ・スポーツ紙 9月3日記事

昨日カステルガンドルフォで行われたレースにおいて、イタリア代表エイトはわずかな差で日本代表エイトに勝利



L'otto azzurro precede di poco il Giappone nel primo recupero di ieri a Castelgandolfo

### ⑥イル・メツサジェロ紙 Il Messaggero 9月4日記事

5万人の前で、アルバーノ湖で行われたボート競技は完了  
ドイツに金メダル3 ロシアに2 チェコとアメリカに1

ドイツは舵手付フォア、舵手付ペア、エイトで優勝。ロシアはシングル・スカルと舵手無ペアで優勝。チェコはダブル・スカル、アメリカは舵手無フォアで優勝。舵手無フォアでは、ファルク・ディ・ドンゴチームは銀メダル。舵手付フォアでは、モト・グッツィチームは銅メダル。舵手付きペアでは、アルミダチームは5位 — レーベックはシングル・スカルで6位、海軍チームもエイトで6位 — イタリア代表たちは良く活躍した

9月3日カステル・ガンドルフォ—良い天気と素敵な景色が、6つの金メダルのために競漕した人々を囲んだ。5万人以上の観客たちも、元気よく選手達を応援した。一番多かったのはドイツ人であった。やはり、国際的に強いと認められているドイツのチームは、金メダルを3つも手に入れた（舵手付フォア、舵手付ペア、エイト）。ロシアは2つ（シングル・スカルと舵手無ペア）。そして、チェコは1つ（ダブル・スカル）。イタリアの選手達が最後の希望を持ち、

期待していた最後の競技（舵手無フォア）で、アメリカにも1つが与えられた。

イタリアの選手たちは、彼らへの期待に完全に応えられなかったとしても、自分たちの素晴らしい体力と腕力を見せながら、堂々と戦った。

結局、舵手無フォアでは、ファルク・デイ・ドンゴ艇は銀メダル、舵手付フォアではモト・グッツィ艇は銅メダル。舵手付ペアでアルミダ艇は5位 — レーベック選手はシングル・スカルで6位、サバウディア市海軍艇もエイトで6位。優秀な結果ではなくとも、7つのレースの中の5つの決勝に進出出来たことだけでも大したことである。しかし、やはりモト・グッツィ艇（舵手付フォア）と海軍艇（エイト）には、もっと良い結果を期待していた。ドイツとロシアは、この様々な競技のリーダーであった。腕力の凄い選手達が所属しているチェコのチームの上昇もすごかった。逆に、金メダルを1つしか手に入れられなかったアメリカのパフォーマンスには失望した。特に、40年前から無敵で優勝してきたエイト<sup>11)</sup>も、今回酷く負けたからである。

もう一つ、大きな榮譽を与えられるべきは、湖であった。一番良い状態でレースを行わせてくれた。カステル・ガンドルフォが舞台として選ばれるように頑張った私たちにとって、大切なことだ。やはりカステル・ガンドルフォは最適な舞台であった。

決勝レースの日であった本日は、世界中から来た優秀な選手達を応援するために、たくさんの人数が集まった。

ちょうど15時に、舵手付フォアから競技がスタート！ロシア、ハンガリー、イタリア、ドイツ、フランス、オーストラリアの各艇が動き出す。他の艇に追いかけられながら、ロシア艇は高速で進み、リードした。500メートル地点では、ロシアはまだ先頭だが、ドイツがイタリアを抜き、1000メートル地点を過ぎるとリードした。結局イタリアは4位になり、フランスは美しく揃った動きでロシアを捕え、疲れを感じ始めたドイツにも挑んだ。イタリアは勢いを増しロシアを抜いたが、それ以上順位を上げられないまま終わった。ドイツが第1位、フランスが第2位、イタリアが第3位。メルボルン五輪の金メダリストだったモト・グッツィ艇には、もう少し上の順位を期待していた。

舵手無ペアは今日の2番目の決勝種目。今回もロシアが、ドイツ、フィンランドとオーストリアに先行し、ピッチ30でリードした。しかし500メートル地点を超えた頃、オーストリアが激しくスパートをかけ先頭を奪った。次はフィンランドの番である。何と情熱的な漕ぎだ！しかしフィンランドのボートはバランスを崩し、スピードを落とし、恐ろしい速さで進むロシアに遅れてしまう。フィンランドはもう第2位を保つ余力を無くし、オーストリアにも先行を許した。ドイツとアメリカも遅れた。

さあイタリアの出番だ。シングル・スカルはロシア代表のイヴァノフ選手の優勝が決定的だった。彼は、ピッチ32で迷わず前に進む。第2位は、レース開始直後はポーランドのものに見えたが、最後の瞬間にドイツに奪われた。イタリア代表のレーベックは第6位になったが、こんなに強い相手に対しては、それ以上は困難だったろう。

第4番目の決勝種目は舵手付ペア。今回もロシアのスタートは圧倒的に早い。後ろには、ピッチ48でドイツ、ピッチ46でイタリアとデンマーク、500メートルのチェックポイントではロシアがまだ先頭、後にはドイツ。次いでイタリアとデンマークが横並び。さらに離れてルーマニアとアメリカ。1300メートル地点まで状態は変わらないが、その後アメリカとデンマークは突然ダッシュ。イタリアは反撃する力がなく、結局第5位に甘んじた。金メダルはドイツのものだ。

銀メダルはロシア、銅メダルはアメリカ。

イタリアの最後の希望は、舵手無フォアに参加するファルク・ディ・ドンゴチームにある。スタートの後、イギリス、ロシアとイタリアはアメリカ、チェコとスイスの前を走っている。500メートル地点の後、イギリスはスピードを落とし、先頭は圧倒的にロシアとなる。イタリアは上手く闘うが、アメリカの力には及ばない。最後の200メートルからロシアとアメリカとイタリアの間の戦いが熱くなる。観客の温かい応援に支えられ、イタリアのチームは全力を出しロシアを差すことができたが、最初にフィニッシュラインを切ったのはアメリカのボートであった。

ダブル・スカル勝利者はチェコである。ロシアが銀メダル、スイスが銅メダル。

エイトのレースが発艇するとき、観客たちは急に静かになる。待ちに待ったファイナルだからである。ドイツ艇がピッチ46で素晴らしいダッシュをし、同じくカナダとチェコも飛び出していく。イタリアはピッチ40~42で頑張っているが、足が力弱く、腕と上手く連動していない。最後の数メートルはまたしてもカナダとドイツの争いで、イタリアとアメリカは疲れが見える。大きな拍手に包まれドイツ艇が金メダルをゲット！そして、カナダ、チェコ、フランス、アメリカ、イタリア。ドイツのタイムは5分57秒2で、カステル・ガンドルフォだけでなく、イタリア国内における新記録である。

### 【レース結果】

#### シングル・スカル 2000m

- |                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| 1. USSR         | 7' 13" 96 (V. Ivanov) |
| 2. Germany      | 7' 21" 26 (A. Hill)   |
| 3. Poland       | 7' 21" 09             |
| 6. <b>Italy</b> | 7' 21" 09 (S. Rebek)  |

#### ダブル・スカル 2000m

- |                   |                                      |
|-------------------|--------------------------------------|
| 1. Czechoslovakia | 6' 47" 50 (V. Kozak, P. Schmidt)     |
| 2. USSR           | 6' 50" 49 (a. Berkutov, Y. Tiukalov) |
| 3. Switzerland    | 6' 50" 59                            |

#### 舵手無ペア 2000m

- |            |                                      |
|------------|--------------------------------------|
| 1. USSR    | 7' 02" 01 (V. Boreiko, O. Golonavov) |
| 2. Austria | 7' 03" 69 (J. Kloimstei, A. Sageder) |
| 3. Finland | 7' 03" 80 (V. Lehtela, T. Pitkanen)  |

#### 舵手付ペア 2000m

- |                 |  |
|-----------------|--|
| 1. Germany      | 7' 29" 14 (B. Knubel, H. Renneberg, K. zerta)      |
| 2. URSS         | 7' 30" 17 (A. Bodganovichus, Z. Yukna, I. Rudakov) |
| 3. USA          | 7' 34" 58 (R. Draeger, C. Findlay, H. Mitchell)    |
| 5. <b>Italy</b> | 7' 40" 92 (G. Piretta, R. Ostino, V. Bruno)        |

## 舵手無フォア 2000m

1. USA 6' 26" 26 (A. Ayrault, T. Nash, J. Sayre, R. Wailes)
2. **Italy** 6' 28" 78 (T. Baraglia, R. Bosatta, G. Crosta, G. Galante)
3. USSR 6' 29" 62 (I. Akhremchik, Y. Bachurov, V. Morkovin, A. Tarabin)

## 舵手付フォア 2000m

1. Germany 6' 29" 12 (G. Cinti, H. Effertz, J. Litz, K. Riekemann, M. Obst)
2. France 6' 41" 62 (R. Dumontois, C. Martin, J. Morel, G. Nosbaum, J. Klein)
3. **Italy** 6' 43" 72 (F. Balatti, R. Sgheiz, F. Tricavelli, G. Zucchi, I. Stefanoni)

## エイト 2000m

1. Germany 5' 57" 18 (K. Bittner, K. Hopp, H. Lenk, M. Rulffs, F. Schepke, K. Schepke, W. Schronder, K. Von Groddeck, W. PAdge)
2. Canada 6' 01" 51 (D. Arnold, W. D' Hondt, N. Kuhn, J. Lecky, L. Loomer, W. Maccherlich, G. Mervyn, S. Biln)
3. Czechoslovakia 6' 04" 84 (B. Janousek, J. Jindra, J. Lundak, S. Lusk, V. Pavkovic, L. Pojezny, J. Sveda, J. Ventus, M. Konicek)
6. **Italy** 6' 12" 73 (P. Amorini, V. Cantarello, G. Casalini, L. Prato, V. Prina, N. Simonato, L. Spozio, A. Torri, G. Pira)

以上①から⑥の記事によって、ローマ五輪イタリア代表クルーが、どのような形で選考されたかを知ることが出来る。東北大学エイト・クルーが対戦したイタリア代表エイト・クルーは、紆余曲折を経て選ばれたイタリア海軍サバウディア市勤務のメンバーであった。協会の方針変更により振り回されてローマ郊外カステル・ガンドルフォ(アルバーノ湖)とミラノ(イドロスカール湖)で死闘を積み重ね、最終選考レースでは中心選手が高熱にもかかわらずローアウトして、勝利をもぎ取った。彼らもまた、東北大学クルーと同様に、代表クルーの座を得るまでに多くのレースでベストを尽くし、五輪の舞台で競ったのであった。

## 結びにかえて

訪問団のうちのボート関係者は、8日間のガイド付団体旅行をアルバーノ湖畔の風光明媚なリゾートホテルで過ごし、積極的に各方面と交流した。しかし筆者は時間の都合等により、中東経由便で3泊5日の独自スケジュールを敢行した。試合当日の朝、単独でローマ市内からアルバーノ湖畔に向かったが、交通の混乱もあり到着は大幅に遅れ、一時はレース不参加を覚悟した。その他、主観的には予想以上に大変な旅行だったが、それでも貴重な機会であったことは間違いない。五輪出場を成し遂げた大先輩たちの偉業を、改めて感じる機会となった。ローマ五輪エイトは、東北大学100周年に際しスポーツ分野の功労者として表彰されたが、将来の150周年や200周年にあたり、東北大学の歴史はそうした人材を得ているだろうか。そんなことを感じさせられる経験であった。

最後に、本稿を作成することに関わって、御支援を賜った方々に感謝したい。

里見総長の親書掲載については、担当部局や関連部局の各位にご高配を賜った。

前述のとおり、ローマ市内のアーカイブズにおける調査においては、イタリア語が全く出来ない筆者を助けて Piera Girolamo 氏が通訳を担当した。また調査結果を和訳出来たのは、Davide Bitti 氏が快く協力を引き受けてくれたからである。お二人の助けが無ければ、本稿は作成できなかった。心から、ありがとうと言いたい。

この2人はローマ大学ラ・サピエンツァ校の Matilde Mastrangelo、稲垣清子、小澤直子の3先生の受講生で、特に小澤先生には何度も電子メールを頂き、お陰様で Girolamo 氏との連絡をとることが出来た。また Mastrangelo 先生には、東北大学里見総長の親書をローマ大学学長にお届けする件で、ご高配を賜った。改めて御礼申し上げます。



Davide Bitti (左) & Piera Girolamo (右)  
(2016年3月1日撮影)

#### 注

- 1) 以下、ローマ五輪クルーについては『東北大学漕艇部百年史』(2003年)にもとづく。
- 2) 1982年(昭和57)の全日本大学選手権で早稲田大学が5分56秒92を記録し、その後は2012年の全日本大学選手権における日本大学の5分41秒18など、大きな進歩が見られる。
- 3) 『会報-ローマ・オリンピックを目指して-』〈東北大学漕艇部後援会〉9(1959年)、『会報-ローマ・オリンピック派遣記念号』〈東北大学オリンピック・クルー後援会/東北大学漕艇部後援会〉12(1961年)、東北大学クルーの五輪前後の動画(千葉建郎氏寄贈)など。
- 4) 同クルー主将の千葉建郎氏からの寄託。
- 5) 詳細は『函南会会報』65号(2015年)に詳しい。
- 6) 2007年の東北大学100周年記念式典にローマ大学ラ・サピエンツァ校からレナートグァリーニ学長(当時)が出席され祝辞を頂いたことへの感謝、2011年の大震災後の復興状況、2012年に総長に就任し海外の有力大学との交流促進を図って人文系の交流事業などを推進していることなどを述べ、ローマ大学とのさらなる交流を願う内容。
- 7) 「カピトリノ文書館はローマ市立文書館であり、街の中心にあるオラトリオ会の教会 Chiesa Nuova に隣接し、17世紀のバロック建築の全盛期にボッロミーニによって設計された建物の中に入っている。(中略)文書館は平日の9時から16時まで開館され、史料は1日に3回決められた時間に請求することができる。この文書館には主に16世紀以降の都市ローマに関わる史料が保存されており、特に近代のローマ都市計画に関する史料が豊富にあることで有名である。」(原田亜希子「月度報告書(2015年1月度)」  
<http://ucrc.lit.osaka-cu.ac.jp/zuno/cgi-bin/dispatch/list.cgi?eid=1428465299>; 2015年12月2日閲覧)
- 8) pitch: 1分間に漕ぐ回数で、艇速が上がるほど多くなる傾向がある。エイトはスタート付近で40~45、レース中盤は35~40程度のことが多い。rpm (rate per minute) とも表記する。
- 9) ちょうどボート1艇分(ペアの場合は10m弱)の差をいう。
- 10) 海軍の船長と表記される。あるいは監督か。
- 11) 米国はエイト競技において、1920年のアントワープ大会から1956年のメルボルン大会まで五輪8連覇を果たしていた。

【翻訳の元と  
なった記事】

②

Pagina 6

## CANOTTAGGIO

DISTURBATE DAL MALTEMPO LE SELEZIONI OLIMPICHE

# L'Armida di Torino (senza Anselmi) si conferma nel due con timoniere

La prova del "due senza", disputata in piena oscurità non è stata ritenuta valida e pertanto verrà ripetuta stamane - Grande attesa per il decisivo spareggio degli "otto", - Il capovoga della M.M. colpito da tonsillite

MILANO, 8. — Un furioso temporale scatenatosi su Milano proprio nell'ora in cui è stato stabilito l'orario delle gare, una violenta pioggia durata a lungo, hanno fatto rinviare di un'ora e mezzo le prove selettive del canottaggio all'idroscalo di Milano. Alle 19,45 anziché alle 18,30 gli equipaggi del « due con » torinese di Torino, Canottieri Pallanza e Canottieri Posillipo hanno potuto scendere in acqua e regatare per la prova di selezione.

Schieramento di tecnici, cronometristi, ufficiali di gara. Molto nervosismo anche al di fuori dello specchio d'acqua. Le selezioni, dopo varie discussioni, hanno rischiato di essere rinviata. E sarebbe stato molto opportuno, dal momento che il campo di gara non era in buone condizioni, la pioggia cadeva sempre e il vento soffiava in abbondanza. Inoltre, a metà della prima gara e per tutta la durata della seconda, i vogatori hanno regatato completamente al buio. Due delle quattro gare in programma hanno comunque potuto essere portate a termine, ma una delle due (quella del « due senza ») non è stata ritenuta valida agli effetti del risultato perché (appunto per l'oscurità), i due armatori (Ginnastica Triestina e Canottieri Lario) sono giunti al traguardo senza vedere niente, tanto è vero che una delle imbarcazioni è finita molto distante al largo, sbandando.

Quello che si è visto (e si è visto molto poco), è servito comunque ad offrire una gara interessante. La gara del « due con », ci sono state polemiche a non finire per questa gara. L'armo dell'Armida di Torino, ormai già da tempo segnalato per le Olimpiadi, in questa specialità, si è visto all'ultimo momento giungere la proposta di una nuova selezione. Tuoni e fulmini dei torinesi che in questo frattempo avevano la seconda voga Anselmi indisposta. Per una otite traumatica, l'armo dei torinesi è dovuto quindi scendere a Milano con la riserva Piretta. E pure con questa riserva i torinesi hanno spadroneggiato sul campo. Ostino e Piretta, partiti a 45 palate, tenevano bene a bordata di barca il Pallanza e il Posillipo. Ai 1500 metri (40 palate al minuto) i due torinesi forzavano e prendevano una imbarcazione di distacco. Ai 1000 metri il vantaggio aumentava e sul finale si sono permessi perfino di cogere a 37-35 palate, tanto netto era il distacco.

Tre imbarcazioni, infatti, dividevano l'Armida dal Pallanza e dal Posillipo, questi due sulla stessa linea.

Il tempo (7'37"5/10 a favore di vento) era quindi ottimo e il distacco del Pallanza era di circa 7". Conferma quindi dell'Armida. La Canottieri Posillipo ha regato bene all'inizio al forcing imposto dai torinesi e Quacurullo e Tricarico per un poco non hanno dato l'impressione di poter regatare alla pari con i torinesi. Dopo i mille metri, i napoletani hanno perso qualche battuta, tenso da farsi superare anche dal Pallanza. Tuttavia, i due giovani napoletani si sono ben comportati e con un poco più di affia-

tamento potranno senz'altro far segnare dei tempi migliori in avvenire.

Comunque sarà senz'altro l'Armida di Torino a rappresentare l'Italia nei « due con » alle Olimpiadi di Roma.

Per quanto riguarda il « due senza », nulla di preciso possiamo dire. La gara infatti ce l'hanno raccontata gli stessi vogatori della Ginnastica Triestina. La selezione si è svolta completamente al buio. Prima è giunta la Ginnastica Triestina facendo segnare il tempo di 7'39" circa. I fratelli Prina della Lario sono giunti a circa 6" di imbarcazioni, cioè a circa 9" di distacco. Ma la prova

(come ha detto il delegato unico Siliprandi) non è da ritenersi valida. Non abbiamo capito, comunque, perché le due imbarcazioni sono state fatte scendere in acqua quando già la visibilità era nulla.

Le altre gare (singolo e due di coppia) sono state sospese e si effettueranno domani mattina. Domani sera invece saranno di scena gli equipaggi dell'« otto ». Per questa gara è corsa una complicazione in seno alla Marina Militare la quale si è vista privare all'ultimo momento del capo-voga Vasco Cantarello il quale ha accusato febbre pronunciata da tonsillite. Il capo-voga della Marina

Militare è ora a letto in albergo. Il rappresentante della Marina Militare vorrebbe sostituirlo con il capo-voga dell'« otto » della junior che vinse a Pallanza tempo ja, cioè Baldas. Inoltre è stato interpellato anche il capo-voga della Canottieri Dongo. Vedremo domani sera, quindi, quali saranno gli schieramenti.

Il delegato unico ing. Siliprandi ha comunque confermato che domani sera, dopo il Consiglio federale che si terrà in un albergo milanese, verranno consegnate le liste degli equipaggi che parteciperanno alle Olimpiadi.

Renato Ferrari

③

Mercoledì 10 agosto 1960

# CANOTTAGGIO

## LO SPAREGGIO DEGLI "OTTO", ALL'IDROSCALO DI MILANO

# Al termine di una entusiasmante regata la MARINA MILITARE precede la MOTO GUZZI

### Terzi i CORAZZIERI davanti alle FIAMME GIALLE - Nel "singolo," ritiro di MARTINOLI - Nel "due di coppia," successo dei CAN. LARIO

#### DAL NOSTRO INVIATO

MILANO, 9. — La grande battaglia preolimpica delle «barche lunghe», che ebbe quale primo teatro nell'ormai lontano 3 giugno scorso il Lago Maggiore e successivamente per due volte quello di Castelgandolfo, si è conclusa oggi all'Ibroscalo milanese mentre sullo specchio d'acqua alquanto agitato dal vento si allungavano le prime ombre della sera.

Così, finalmente, a quindici giorni circa dall'insediarsi delle Olimpiadi remiera, è venuto fuori l'otto che rappresenterà l'Italia nella più prestigiosa competizione mondiale. Salvo qualche altro ripensamento, sempre possibile, considerata la costante incertezza dei dirigenti della F.I.C.

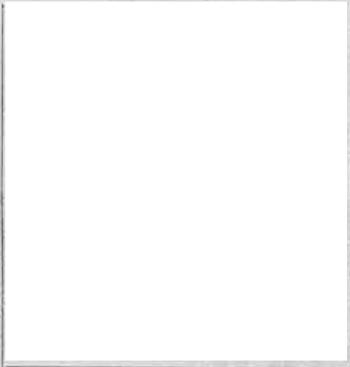
La gara che è stata all'origine di tante polemiche e sfilza ormai, oltre il traguardo, l'ottimo di merito e i quattro scarti da dieciotto metri: quanti tutti gli uomini degli equipaggi si sono rovesciati all'indietro o sono piegati in avanti sui remi, schiantati dall'innorme fatica. I simulatori, piccolissimi come sempre, spruzzano acqua addosso ai primi uomini di punta.

Dall'ultima sfida alla morte tra i giganti del remo, è venuto vincitore l'armata della Marina Militare di Sabaudia, vale a dire proprio l'ultimo arrivato. A terra i pochi spettatori applaudevano i protagonisti della stupenda regata, forse la più bella delle quattro disputate finora dagli otto italiani in linea per i Giochi di Roma.

Per quanto ci riguarda, siamo stati ancora una volta protesi in patria. In due nostri articoli precedenti scrivevamo, infatti, che la Marina Militare poteva essere la nuova «bomba» pronta a scoppiare tra i piedi dei dirigenti la Feder-canottaggio. È questo è ciò che oggi all'imbrunire sulle acque dell'Ibroscalo, allorché tutti si attendevano che la battaglia dicompasse tra la Finanza, che aveva sostituito in questa occasione i suoi amici di viale Cavour, e che quindi si supponeva avesse migliorato il suo rendimento, e la Moto Guzzi che tre settimane prima a Castelgandolfo aveva messo le prue avanti alle Fiamme Gialle. Poi, occlusamente, c'erano anche i Corazzieri sempre paucissimi e pericolosi e assenti al momento.

Prima di passare però al racconto della regata indimenticabile, soprattutto per la rabbia con la quale è stata combattuta dai quattro equipaggi migliori d'Italia, occorre dire una breve parentesi che procurerà un immenso piacere agli amici di Castelgandolfo. Ebbero a amici del Lago di Albano, d'ora in poi all'Ibroscalo, un vesticcio peraltro abbastanza maligno che demeritava, specie nella seconda parte del percorso, gli armi che navigavano al largo, ossia la Moto Guzzi che aveva avuto assegnato dalla sorte il numero d'acqua «4». La Marina Militare scartò invece la sua rotta proprio sotto la sponda e quindi è da ritenere che sia stata leggermente favorita rispetto al capice, a chi regatava al largo.

Comunque questo particolare iscnico-meteorologico, che abbiamo ritenuto doveroso sottolineare, non ridimensiona affatto l'impresa dei marinai del comandante Tralori, per una ragione molto importante. Vasco Cantarelli, il capocoga dell'armata vittoriosa, ieri sera era stato colpito da un improvviso e violento attacco di febbre che gli aveva procurato un'ebbrezza da cavallo. Per tutta la notte il padovano, assistito dal medico militare della Marina, era stato sottoposto ad una energica cura a base di sulfamidici, iniezioni endovenose ecc. tutti rimedi insomma atti a far scendere l'altissima temperatura. Oggi, mezzogiorno prima della regata, Cantarelli aveva 37,5 ed appariva molto depresso, ad ogni modo deciso, da buon marinaio, a qualunque costo a non svenire nell'impresa, forse più importante della sua carriera di vogatore. Cantarelli all'arrivo è crollato e appena sceso di barca è stato adagiato su di un grato in attesa dei primi soccorsi, ma pur nel suo tremendo malessere egli aveva gli occhi che luccicavano dalla gioia: la



Marina Militare aveva vinto e ancora una volta, come fu il Melbourne e come fu in parte anche ad Helsinki, avrebbe rappresentato l'Italia nel tipo di barca più ammirato: l'otto di punta.

La lotta sui duecento metri, come abbiamo detto, è stata impressionante, al via, dato dal milanese Colombo, le quattro possenti barche scattarono simultaneamente azionate da una spettacolare grandola di colpi: 46 ne batteva la Moto Guzzi, 46 la Finanza, 46 i Corazzieri, 46 la Marina che

riuscita a mettere la punta avanti agli altri tre avversari.

Dopo mezzo chilometro la Marina era ancora in testa di pochi centimetri, battendo il colpo, sulla Guzzi che a sua volta precedeva nell'ordine la Finanza e i Corazzieri. Ai 700 metri i quattro «otto» toglievano sul passo: un passo glorioso da compiersi, con la Marina a 39-40 colpi al minuto, con la Guzzi a 37, la Finanza a 36, i Corazzieri a 38. Cinquantametri dopo la Guzzi riusciva a riportare la prua di una iaccia avanti alla Marina.

Finanza e Corazzieri lottavano nella scia dei lariani e dei marinai, con le Fiamme Gialle comunque avanti nell'ordine alle lunghe guardie del Presidente della Repubblica.

Ai 1000 metri di nuovo la Marina Militare, come un sultano viaggiante in superficie, rimetteva le prue avanti alla Guzzi. Ai 1500 metri i rosti di Mandello Lario scattavano e per un attimo quasi sembravano dondesiero farsella, ma la Marina Militare con eroica volontà resisteva, procedendo per un centinaio di metri appaio, per poi scatenarsi nel finale. I guastini, proiettissimi dal vento, cedevano leggermente quel tanto da permettere alla Marina di tagliare il traguardo con un vantaggio di 7/10 di secondo. Da segnalare l'irruento finale dei Corazzieri che riuscivano a precedere nettamente sul traguardo gli eterni avversari, le Fiamme Gialle.

In precedenza si erano svolti gli ultimi spareggi riguardanti lo skiff e il doppio. Il primo vinto nettamente da Kober che tagliava il traguardo da solo, essendo crollato Martinoli ai 1700 metri colpito da una violenta colica epatica. Il secondo vinto anche facilmente dal Lario di Como sulla Marina che solo nel finale sveniva. Il ritmo abbastanza lento peraltro, dei colpi tenuto durante la gara, ma comunque arrivato nettamente distaccato. Adesso per favore, signori dirigenti del canottaggio italiano, pensiamo soltanto alle imminenti Olimpiadi!

Alberto Marchesi

④

DOPO LE ULTIME SELEZIONI OLIMPICHE

# Molte luci ed alcune ombre del canottaggio azzurro

Esame degli armi che rappresenteranno l'Italia ai Giochi - Lo scherzo dell'Idroscalo - Elogio della MARINA MILITARE - Comunque bisognava pensare un po' prima all'«otto» misto

Dopo circa due mesi di polemiche e rabbiosi confronti tra gli equipaggi in lizza per rappresentare l'Italia alle imminenti Olimpiadi del remo, finalmente nella tarda serata di martedì scorso, e qualche ora di distanza dagli ultimi spareggi disputati all'Idroscalo, la Federanottaggio ha diramato l'elenco ufficiale degli armi azzurri che nei prossimi giorni si trasferiranno definitivamente in ritiro collegiale sul Lago di Albano.

Il Consiglio di Presidenza della FIG ha scelto come segue:

Singolo: Rehek della Ginnastica Triestina.

Due senza: Petri e Mosetti della Ginnastica Triestina.

Due con: Ostino, Anselmi, tim. Erano dell'Armida Torino.

Doppio: Lucini e Pestuggia della Lario di Como.

Quattro senza: Bosatta, Baraglia, Galante, Crosta della Falck di Dongò.

Quattro con: Spitta, Zucchi, Balatti, Trincavelli, tim. Stefanoni della Moto Guzzi di Mandello Lario.

Otto: Cantarello, Simonato, Prina, Torri, Casatini, Prafo, Spozio, Amorini, tim. Pira, della Marina Militare Sabaudia.

Riserve a disposizione: Moitoli (Moto Guzzi), Ciucci (Canot-

tieri Livornesi), Prina, Fioravante (Lario di Como), Piretta (Armida Torino).

Le novità riguardano soltanto due tipi di barca, precisamente il due senza timoniere e l'otto. Per il resto infatti sono stati riconfermati tutti gli equipaggi già segnalati il mese scorso dopo le selezioni di Castelgandolfo.

Nel pair-oar come nell'otto, dunque, le maglie azzurre sono andate ai componenti di due armi «recuperati» all'ultimo momento, precisamente Ginnastica Triestina e Marina Militare. Ma mentre la Marina Militare le ha conquistate a prezzo di una dura lotta nella quale erano presenti tutti i pretendenti, la Ginnastica Triestina è stata in un certo senso favorita dall'assenza dell'equipaggio della Lario di Como

composto dai fratelli Egidio e Fioravante Prina, uno dei migliori due senza visti in Italia in questi ultimi anni, causata da una seria forma epatica (un male che affligge spesso i canottieri) di Egidio. Né ci è apparsa probante la vittoria conseguita l'altra sera all'Idroscalo dai discontinui Petri e Mosetti, in quanto l'equipaggio superstita avversario — quello della Falck nella formazione Trivini-Tosarini — è sta-

to costretto ad abbandonare la lotta a causa della disastrosa rotta tenuta dai giuliani che ai 1200 metri per poco non abbandonavano i iariani. Allora se c'era una prova da ripetere, nonostante il tempo ormai stringa, doveva essere proprio questa dei pair-oars.

In quanto all'otto abbiamo già raccontato da Milano le appassionanti vicende dell'ultimo spareggio disputato all'Idroscalo. Vicende che ci hanno fatto concludere che anche nello sport esiste una Nemesis, una dea vendicatrice pronta ad intervenire al momento giusto. L'Idroscalo infatti, bacino normalmente tranquillo tanto da essere classificato tra i migliori d'Europa, al momento della regata decisiva era molto agitato, ma soprattutto presentava evidenti scompensi tra i numeri d'acqua assegnati alle quattro barche. In pratica chi vogava al largo era più danneggiato rispetto a chi vogava protetto dalla riva: la Moto Guzzi sfortunatamente aveva il numero d'acqua peggiore, al contrario della Marina che aveva avuto il migliore, forse proprio per una specie di imponderabile forma di giustizia divina, in quanto il suo capovogatore Cantarello era salito in barca febbricitante e debilitato

dalle iniezioni e dalle medicine ingurgitate per alzarsi dal letto. Praticamente al paradosso quasi umoristico di avere abbandonato il campo di regata olimpico per l'Idroscalo al fine di «essere tranquilli», si è aggiunto il beffardo superparadosso del bacino milanese agitato e traditore, alla stessa maniera di certe giornate poco propizie di Castelgandolfo.

Così la Marina Militare si è vendicata sulla Moto Guzzi che l'aveva estromessa nel quattro con timoniere, estromettendo a sua volta la Moto Guzzi dall'otto. In due precedenti nostri articoli noi scrivevamo al proposito in data 28 luglio: «Sarrebbe oltremodo divertente se tra i tre litiganti (Finanza, Corazzieri e Moto Guzzi) fosse proprio il quarto (la Marina) a godere facendo restare tutti con un palmo di naso. In fondo per il Comandante Arrigo Trallori potrebbe essere questa la migliore forma... di vendetta». Ancora lunedì scorso ritornando sull'argomento scrivevamo: «Tra i quattro armi in effetti dovrebbero esistere soltanto distacchi infinitesimali di tempo... L'equipaggio della Marina comunque potrebbe rivelarsi come la nuova «bomba» pronta a scoppiare tra i piedi dei tecnici del remo az-

zurro a due settimane circa dalle Olimpiadi».

Oggi al punto in cui siamo giù il cappello in fronte alla Marina! Anche però restando del parere che se i tecnici della FIG avessero impostato subito dopo le selezioni di Castelgandolfo un otto misto Moto Guzzi-Corazzieri, avremmo adesso un equipaggio migliore. Ha defluso all'Idroscalo la Finanza che noi riteniamo al contrario migliorata dopo l'immissione del livornese Ciucci al quarto carrello. Le «fiamme gialle» sono state invece superate anche dai Corazzieri protagonisti di un energico serrate da cardiopalmo. Dicono che sia stata colpa delle pale dei remi nuove, costruite su ordinazione, di dimensioni decisamente notevoli.

Le selezioni ormai sono architate. Tra due settimane gli armi azzurri si incontreranno nella disfida olimpica con i migliori equipaggi del mondo. Le carte buone del remo italiano restano quelle della Falck nel quattro senza, della Moto Guzzi nel quattro con e dell'Armida di Torino nel due con timoniere. Per il resto speriamo sul tradizionale e fatidico «stellone».

Alberto Marchesi

⑤

IL MESSAGGERO - Domenica 4 Settembre 1960

# Tre medaglie d'oro ai canottieri della Germania due ai russi, una ai cechi e una agli americani

I tedeschi hanno vinto il « quattro con », il « due con » e l'« otto », i sovietici la « skiff » e il « due senza », i cecoslovacchi il « doppio » e gli statunitensi il « quattro senza ». In questa gara la Falck di Dongo ha ottenuto la medaglia d'argento, mentre nel « quattro con » la Moto Guzzi si è aggiudicata la medaglia di bronzo. Il « due con » dell'Armida si è piazzato al quinto posto - Rehek, nello « skiff » e l'« otto » della Marina Militare sono giunti setti - Buona, nel complesso, la prova degli italiani

Del nostro inviato

**Castelgandolfo, 3 settembre**  
Una giornata meravigliosa ed un passaggio singolarmente interessante ed era al varco del lago caldissimo ed al vertice della chioma lungo l'altipiano di ogni copione all'ultima fatica dei canottieri impegnati nell'ambita conquista del settimo olimpionico. Da lontano, scintillando, calcolavano in oltre 5000 persone, dislocata da ogni parte a saltare e incitare i violenti canottieri. Prevedevano l'elemento tedesco.

La Germania, confermando la sua nella supremazia in campo internazionale in questa avvincente disciplina sportiva, si è aggiudicata tre titoli: « quattro con », « due con » e l'« otto » (quattro « due » e due « otto ») nel « quattro con » e nel « due con » della Cecoslovacchia (« doppio »); infine il settimo titolo si è andato all'equipaggio statunitense del R.C. Lake Washington nella « canoa » del « quattro senza », in cui gli italiani riproposero la loro esperienza per la conquista del titolo.

Abbiamo detto degli italiani. Ebbene i canottieri azzurri, pur con confermando appunto le sue, restano in essi ripresi, si sono rapidamente battuti, meritandosi ancora una volta in finale le loro qualità sportive, unite alla marcia di fondo. Hanno conquistato una medaglia d'argento, ma il « quattro con » e il « due con » sono stati appannaggio dei tedeschi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il bilancio di per se stesso non è certo esaltante, ma il fatto di aver conquistato l'argento in cinque delle sette discipline doveva e deve costituire un successo apprezzabile. Comunque, ripetiamo, molto di più si aspettavano dal « due con », dal « quattro con » e dalla « skiff ». Ed eccolo dall'« otto » della Marina, che in questa occasione ha confermato la medesima del suo predecessore, e che, schiacciato, ha vinto il primo della prima parte della gara, ma ha avuto il solito esito, risultando arretrato. Siamo, in definitiva, ancora legati da questa situazione di inferiorità, ma qualche anno non avevano rivali alle Olimpiadi.

Una grande vittoria l'ha ottenuta il loro, che si è avventato nelle sue vesti migliori alle alle Olimpiadi della canoa che a quelle del canottaggio. È un motivo di soddisfazione per tutti coloro che fanno parte di Castelgandolfo nella loro ed eterna schiacciata battaglia del lago.

Campo ideale quello di Castelgandolfo per competizioni canottistiche. Le notevoli rive del lago, bene sono benedite e impregnate, no, degradanti indolentemente verso ponente, e naturalmente, nel loro stato naturale di un ampio, sicuro spazio, al fondo del quale si staglia una linea di Castelfandolfo nella loro ed eterna schiacciata battaglia del lago.

Ogni ora giornata di finali e un risultato eccezionalmente numeroso è sceso ad applaudire i grandi atleti, spettatori di tutto il mondo.

Una cronometrista inossidabile alle ore 13 apre la gara. Partono da terra PRAB, Ungheria, Italia, Germania, Francia, Australia. I sovietici hanno una partenza fulminea e si avventano, fianco a fianco, con l'Italia, Germania, Ungheria. Al 500 metri sono primi i sovietici, che risultano una gatta di impressionanti scatti. Al 1000 metri sono primi per una barca. Gli azzurri sono in quarta posizione, superati, anche dai francesi, che sono benedite e ripropongono la loro esperienza nel « quattro con » e il « due con ».

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.

Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi. Il « quattro con » è stato vinto dai sovietici, mentre il « due con » è stato vinto dai cecoslovacchi.